

「国語の力」の成立過程 IX

—— 国語教育学説史研究 ——

野 地 潤 家

一一一

「国語の力」(有朋堂版)には、蕪村に関して、つぎのような引用が見られる。

- 「試に蕪村の句を探りていえば、
- 1 月天心、登しき町を通りけり
 - 2 五月雨や大河を前に家二軒
 - 3 蕭条として石に日の入る枯野かな
 - 4 時鳥平安城をすぢかひに
 - 5 心太さかしまに銀河三千丈
 - 6 柳散り清水涸れ石どころか
 - 7 梅遠近南すべく北すべく
 - 8 をちこちをちこちと打つ砧かな
 - 9 鮮を圧す石上に詩を題すべく
 - 10 二本の梅に遅速を愛すかな
 - 11 麗なる我藹交存す野分かな
- のように、漢語・てにをを、句調・句法の自由なる表現によりて、

一分のたるみもないまでに緊って居る。(正岡子規「俳人蕪村」参照) (有朋堂版「国語の力」、二〇九―二一〇頁) (引用者注、句の要点は作者、句肩および文中の小番号は、引用者の施したものの。)

正岡子規の「俳人蕪村」は、つぎのような構版になっていた。

- | | |
|--------|----------|
| 1 緒 言 | 10 句 調 |
| 2 積極的美 | 11 文 法 |
| 3 客観的美 | 12 材 料 |
| 4 人事的美 | 13 縁語及譬喩 |
| 5 理想的美 | 14 時 代 |
| 6 複雑的美 | 15 履歴性行等 |
| 7 精細的美 | 附 録 |
| 8 用 語 | 16 蕪村と几童 |
| 9 句 法 | |

「国語の力」に引用された前掲十一句は、右の「俳人蕪村」のうち、用語から文法までに収めてある句群から選ばれているようであ

る。「国語の力」の中に、漢語・てにをは・句調・句法とあるのも、ほぼ「俳人蕪村」の考察項目をふまえてのことのように考えられる。

「漢語」は、「俳人蕪村」では、「用語」が、(一)漢語・(二)古語・(三)俗語の三つに分けて考察してあるので、それらの(一)漢語を採ったものと思われる。「てにをは」も、「俳人蕪村」の「句法」のうちに、「更に驚くべきは蕪村が一句の結尾に『に』といふ手爾葉を用ゐたる事なり。」(「俳諧大要・縮刷合本」、大正2年7月15日、靑山書店刊、五六頁)とあるのによつてゐるかと思われる。また、「国語の力」の「句法」は、「俳人蕪村」の「文法」によつてゐると考えられる。

このようにして、「国語の力」に引用された蕪村の句十一句について、子規が「俳人蕪村」において、どのように説いてゐるかを見ると、つぎのようである。

1 月天心、心貧しき町を通りけり

「(一)漢語は蕪村の喜んで用ゐたる者にして、或は漢語多きを以て蕪村の唯一の特色と誤認せらるゝに至る。此一事が如何に人の注意を惹きしかを知るべし。蕪村が漢語を用ゐたるは種々の便利ありしに因るべけれど、第一に漢語が国語より簡短なりしに因らずんばならず、複雑なる意匠を十七八字の中に含めんには簡短なる漢語の必要あり。又簡短なる語を用うれば叙事形容を精細に為し得べき利あり。

1 指雨車を胡地に引き去るかすみかな

2 闇に坐して遠き蛙を聞く夜かな

3 祇や鑑や、髭に落花を捻りけり

4 鉢桶をこれへと樹下の床几かな

5 三井寺や日は午に暁る、若楓

6 桔の花や善き酒蔵す癖の内

7 耳目肺腸こゝに玉巻く芭蕉庵

8 採尊をうたふ彦根の俗夫かな

9 鬼貫や新酒の中の骨に処す

10 月天心、心貧しき町を通りけり

11 秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者

12 雁鳴くや舟に魚焼く琵琶湖上

の如き此例なり。されども漢語の必要ありとのみにて濫りに漢語を用ゐ、為に一句の調和を缺かば佳句とは言はれじ。「胡地」の語の如き余り耳遠く普通用ゐるべきには非るを「指雨車」の語上に在り「引去る」といふ漢文直訳風の語下にあるために一句の調和を得たるなり。「落花」の語は「祇や鑑や」に対して響き善く、「芭蕉庵」といふ語なくんば「耳目肺腸」とは置く能はず。「採尊」は漢語に非れば言ふ可らず、さりとて此語はかりにては国語と調和せず。故にことさらに「俗夫」とは受けたり。」(「俳諧大要」、四一—四三頁)

2 五月雨や大河を前に家二軒

「第二は国語にて言ひ得ざるにはあらねど漢語を用ゐる方善く其意匠を現すべき場合なり。漢語を用ゐて勢を強くしたる句

1 五月雨や大河を前に家二軒

2 夕立や箆も乾かず一千言

3 時鳥平安城をすちかひに

4 絶頂の城たのもしき若菜かな

5. 方百里雨風よせぬ牡丹かな

『おほかは』と言へば水勢ゆるく『たいか』と言へば水勢急に感ぜられ、『いたゞき』と言へば山峻しからず『せつちやう』と言へば山峻しく感ぜらる。』(同上書、四三―四四べ)

5. 蒲条として石に日の入る枯野かな

「寂として客の絶間の牡丹かな

・蒲条として石に日の入る枯野かな

の如きは『しん』として『淋しさは』など置きたると大差無けれど猶漢語の方適切なるべし。』(同上書、四五べ)

4. 時鳥平安城をすぢかひに

「更に驚くべきは蕪村が一句の結尾に『に』といふ手爾葉を用ゐたる事なり。例へば

1 帰る雁田毎の月の曇る夜に

2 菜の花や月は東に日は西に

3 春の夜や宵曙の其中に

4 畑打や鳥さへ鳴かぬ山陰に

5 時鳥平安城をすぢかひに

6 蚊の声す烈冬の花散るたびに

7 広庭の牡丹や天の一方に

8 庵の月あるじを問へば芋掘りに

8 狐火や鬮籠に雨のたまる夜に

常人をして此句法に倣はしめば必ずや失敗に終はらん、手爾葉の結尾を以て一句を操る者蕪村の蕪村たる所以なり。』(同上書、五六―五七べ)

1 心太さかしまに銀河三千丈

5 心太さかしまに銀河三千丈

6 柳散り清水溜れ石ところく

7 梅遠近雨すべく北すべく

8 本ちこちをちこちと打つ砧かな

「五七六調五八六調六七六調六八六調等にて終六言を

1 夕立や筆も乾かず一千言

2 ほうたんやしらかねの猫こかねの蝶

3 心太さかしまに銀河三千尺

4 炭団法師火桶の穴より覗ひけり

の如く置きたるは古来例に乏しからず。終六言を三三調に用ゐたるは蕪村の創意にやあらん。其例

1 蟻峨へ帰る人はいづこの花に暮れし

2 一行の雁や端山に月を印す

3 朝顔や手拭の端の藍をかこつ

4 水かれぬ、藁かあらぬか蕎麦か否か

5 柳散り清水溜れ石ところく

6 我をいとふ隣家寒夜に鍋をならす

7 箱百里舟中に我月を領す

其外調子のいたく異なりたる者あり。

1 梅遠近雨すべく北すべく

2 閑子鳥寺見ゆ麦林寺とやいふ

3 山人は人なり閑子鳥は鳥なりけり

4 更衣母なん藤原氏なりけり

最も奇なるは

1 ぞちこちをちこちと打つ砧かな

の句の字は十六にして調子は五七五調に吟じ得べきが如き。』(同上)

上書、六二―六四べ)

9 鮮を庄す石上に詩を題すべく、
「漢語俗語雅語の事は前にも言へり。其の他動詞助動詞形容詞にも蕪村ならでは用ゐざる語あり。」

1 鮮を庄す石上に詩を題すべく。

2 紋子の頭巾眉深きいとをしみ。

3 大矢数弓師親子も参りたる。

4 時鳥歌よむ遊女聞ゆなる。

5 麻刈れと夕日此頃斜めなる。

『たり』『なり』と言はずして『たる』『なる』と言ふが如き、『べし』と言はずして『べく』と言ふが如き、『いとをし』と言はずして『いとをしみ』と言ふが如き、蕪村の故意に用ゐたる者とおほし。前人の句亦此語を用ゐたる者無きにあらねど、そは終止言として用ゐたるが多きやうに見ゆ。蕪村のはことさらに終止言ならぬ語を用ゐて余意を永くしたるなるべし。」(同上書、六五べ)

10 二本の梅に遅速を愛すかな

11 籠なる我藪爰存す野分かな

12 二本の梅に遅速を愛すかな

13 籠なる我藪爰存す野分かな

の『愛すかな』『存す野分』の連続の如き

3 夏山や京尺し飛ぶ鶯一つ

の『京尺し飛ぶ』の連続の如き

4 関夕狐のくれし寄楠を焼ん

の『関夕』の連続の如き漢文より来りし者は従来の国語に無き句法を用ゐたり。此等は固より故意に此新句法を造りし者而して明治の

俳句界に一生涯を開きし者亦多く此辺より出づ。」(同上書、六七―六八べ)

これらを見れば、「国語の力」に引用されている蕪村の句(十一)は、正岡子規の「俳人蕪村」中の、美を論ずる部分よりも、表現を論ずる部分(用語¹¹文法)から、選ばれたものといえる。子規が例句を挙げてくわしく説明しているものの中から、垣内松三先生の好みにもあい、「一分のたるみもないまでに緊って居る」句が選ばれているようである。垣内先生の選句眼の確かさをうかがわせるものがある。また一方では、蕪村の句の中、最もよく人々に膾炙しているものが選ばれているようにも考えられる。

1 月天心登しき町を通りけり——この句は、子規の挙げている十二句の中から選ばれている。「最も洗練され、漢語の効果を平明に示しているものが採られている。また、垣内先生の好みもはたらいっているであろう。」

2 五月雨や大河を前に家二軒

3 蕭条として石に日の入る桔野かな

この両句の漢語の用いかたについては、それぞれ子規が説明を加えている。前句は、五句の中から、後句は、二句の中から採られたものである。子規の説明も適切であるが、簡明に漢語の表現効果を示し、かつ蕪村の句としてもすぐれているものが選ばれたと考えられる。

4 時鳥平安城をすぢかひに——この句は、子規の挙げている九句の中から採られている。「平安城」は、漢語の例としても、挙げられているが、垣内松三先生は、「てにをは」(ここでは、「に」)のよくきいて例として、この句を採られている。子規の挙げて

いる句には、²菜の花や月は東に日は西に の例もあるが、垣内先生としては、この「時鳥」の句を探られている。一つには、蕪村らしい句として、一つは垣内先生の好みから選ばれたものであろう。

⁵心太さかしまに銀河三千丈、

⁶柳散り清水濁れ石ところか、

⁷梅遠近南すべく北すべく、

⁸をちこちをちこちと打つ砦かな

「心太」の句は、子規の挙げている四句の中から、「柳散り」の句は、七句の中から、「梅遠近」の句は、四句の中から、「⁸をちこち」の句は、この句のみ。それぞれ選ばれている。これらは句調の面から見られているのであるが、子規は、「柳散り」の句については、「石ところ」³「³」の三三調になっているのを強調しているのに、垣内先生はその全面（上五中七下六）に注目していられるようである。いずれも蕪村独自の句調をうかがいうる句を探られている。

⁹餅を庄す石上に詩を題すべく、

¹⁰二本の梅に遅速を愛すかな

¹¹蕪なる我齋爰存す野分かな

これらのうち、⁹は、子規の挙げてある五句の中から選ばれている。1011の二句は、子規があわせ掲げているのを、そのまま採っている。三句とも、句法（文法）に関して選ばれている。

これら十一句の採録のされかたを見ると、いかにも要をえた選びかたになっていることがわかる。さらに、垣内松三先生の好みをもつかうことができる。と同時に、右に見たような引用であるため、挙げられた十一句の表現を、漢語・てにをは・句調・句法のど

の視点から見えていくかについては、容易でない点も残る。そこに、（正岡子規「俳人蕪村」参照）と、垣内先生が注記されたわけも見いだせよう。まさしく、子規の「俳人蕪村」を参照することによって、蕪村の句の表現効果をも、よく理解し味わうことができよう。その点では、この注記は、「国語の力」の説者に対して、親切な手引きの役割をも果たしている。

さて、「国語の力」には、さらに、蕪村の句について、つぎのように述べられている。

「子規子が、

立ち並ぶ木も古びたり梅の花（舎羅）

二もとの梅に遅速を愛すかな（蕪村）

すくなきは庵の常なり梅の花（蒼虬）

を比較して「元祿（舎羅）の句はありのままのけしきを飾らずたくまず裸にて押し出したる気味あり。天明（蕪村）の句はとにかくにゆるみ勝なるものを少しもゆるめじとて締めつけくって一分も動かさじと締めつけたらんが如し。——天保（蒼虬）の句はゆるみ勝なるものを猶ゆるめたらん心持あり。——佐藤一斎にかありけん、聖人は赤合羽の如し。胸に一つのしまりだにあれば全体は只ふわふわとしながら終に体を離れずと申せしとか。元祿調のしまり具合は先づこんなものなるべし。天明調はどこまでも引しめて五分もすかさぬ様に折目正しく善物齋たらんが如く、天保調はのろまが袴を横に穿ちて祭礼の錢集めに廻るが如し」（『俳諧大要』一一六―八）とあるのもおもしろい説明である。」（有朋堂版「国語の力」、二一〇―二一一）

正岡子規の「俳諧大要」は、

- 第一 俳句の標準 第五 修学第一期
 - 第二 俳句と他の文学 第六 修学第二期
 - 第三 俳句の種類 第七 修学第三期
 - 第四 俳句と四季 第八 俳諧連歌
- の八項から成っている。

右の引用は、第六 修学第二期の中、つぎのように述べてある部分から、抄出されたものである。

一句調の最もしまりたるは安永天明の頃なりとす故に同時代の句は概ね善し元祿の句は之に比すれば稍々たるみたり然れどもたるみ様全体にたるみてしかも其程らひ善ければ元祿の佳句に至りては天明の及ぶ所にあらずつまり元祿の佳句には纏帯多く天明には少し天保時は總たるみにて一句の採るべきなし和歌は萬葉はたるみてもたるみ方善し古今集はたるみて悪し新古今はやゝしまりたり足利時代は總たるみにて俳句の天保時代と相似たり漢詩にては漢魏六朝は萬葉時代と同じくたるみても善し唐時代はたるみも少く又たるみても悪しからず俳句の元祿時代に似たり宋時代は總たるみといふて可ならんか明清に至り大にしまりたる傾きあり俳句の安永天明に似たり（然れども人によりてたるみたるも少からず）

一試みに句のたるみし有様を比較せんがために元祿と天明と天保との三句を列挙すべし

- 立ち並ぶ木も古びたり梅の花 舎 羅
- 二もとの梅に遅速を愛すかな 蕪 村

すくなきは庵の常なり梅の花 蒼 虬

句の巧拙は姑く論せず其句調の上に就いていはんに元祿（舎羅）の句はありのまゝのけしきを飾らずたくまらず裸にて押し出したる気味あり天明（蕪村）の句はとかくにゆるみ勝なるものを少しもゆるめじとて締めつけ、一分も動かさじと締めつけたらんが如し天保（蒼虬）の句はゆるみ勝なるものを猶ゆるめたらん心持あり要するに元祿は自然なる処に於て取るべく天明は工夫を費す処に於て取るべし独り天保に至りては元祿を模したるつもりにて元祿にも何にもならぬ者即ち工夫を凝らさぬふりして其衷工風を凝らしたる者何の取所もなきことなり少くとも此三体に於ける句法の変化を精細に知らざれば俳句の堂に上りたりといふを得ず世上往々天保流の句を評して蕪村調などと評する者あり笑ふに堪へたり

一元祿と天明とは各長所あり何れに従ふも善し又元祿にして天明に似天明にして元祿に似たる者も多し是れ天工人工其極処に至りて相一致する所以なり

一佐藤一齋にかありけん聖人は赤合羽の如し胸に一つのしまりだにあらば全体は只ふわ〜としながら終に体を離れずと申せしとか元祿調のしまり具合は先づこんなものなるべし天明調はどこ迄も引しめて五分もすかぬ様に折目正しく着物着たらんが如く天保調はのろまが袴を横に穿ちて祭礼の錢集めに廻るが如し又建築に譬は元祿は丸木の柱堂の屋根に庭木は有り合せの松にても杉にても其儼にしたらんが如く天明は柱を四角に攢り床違へ棚を附け欄間の飾りより天井板まで美を尽してしかも俗ならぬ様に家は櫓を打ちて動かぬ様に建てたらんが如く天保は床脇の柱だけ丸木を用

る無理に丸窓一つを穿ち手水鉢の腕木も自然木を用る門楣の扁額
は必ず腐木を用るしかして家の内は小細工したる机硯土瓶茶瓶杯
の俗野なる者を用ゐたらん如し又之を談話にたとはゞ元祿の人は
面白くてもつまらなくても真実をありのままに話し天明の人は上
手に面白く嘘をつき天保の人はありがちのつまらぬ話を真実らし
く話して其実はそれも嘘なりけんが如し（「俳諧大要」、七三―
七六）

正岡子規の述べている部分と「國語の力」に引用されている部分
とを比較すると、引用文中の、「――佐藤一齋にかありけん、」の
「――」には、省略の個所のあることがわかつてくる。元祿・天
明・天保の句調のちがいを説明するための比喩のくりかえしについ
ては、その有効なるものを一つだけにとどめ、残余を省いているの
である。そのため、三期の句調の説明としては、平明でわかりやす
く、すっきりしたものとなっている。

「國語の力」には、「俳諧大要」からの右の引用のち、「とあ
るのもおもしろい説明である。」と記してある。句調のちがいの明
確・明快な比喩の説明を、引用者はかなり高く評価していることが
わかる。それは、垣内先生好みの説明法でもあったと見られる。同
時に、子規の句調の時代展開を、明確に跡づけているところにも、
垣内先生としては、深い関心を注がれたようである。説明のしかた
の巧妙さのみでなく、その展開の見方についても、啓発を受けられ
たところから、こうした引用をされたと考えられるのである。

さらに、「國語の力」には、蕪村の句「飛入りの力者怪しき角力

かな」についての、子規の説明が、かなり長く、つぎのように引用
されている。

「なお
飛入りの力者怪しき角力かな（蕪村）」

に就いて、

『此の句句より蕪村集中の傑作に非ず。寧ろ下位にあるものな
り。然れども大家の伎倆は往々悪句によりて評定せられるることあ
り。此句恐らくは蕪村の伎倆を知るに足らんか。蓋し此一句の精神
は『怪』の一字にあり。人の誤解する所亦此一字にあるなり。國語
に『あやし』といふ語幾様の意味に用うるや能く究めずと雖、昔は
見苦しき賤が家をあやしげなる家など言ひたるは少からず、されど
そは此処に用うべきにあらず。普通には、あやしといふ語を漢字の
怪の意に用う。怪とは奇怪、妖怪、神怪、鬼怪などとして総て人間わ
ざならぬ事に用う。此一句の意味を探ぐるに左の如し。ある処にて
秋のはじめつつかた毎夜の若衆打打ち寄りて辻角力を催すに力自慢の
誰彼自ら集まりてかりそめながら大閨閨脇を氣取りて威張りつゝ面
白き夜を篝火の側に更しける。去る程にある夜の事今迄は見なれぬ
一人の男のつと此角力場に來りて我も力競べんといふ。男盛りの若
者ども血氣にはやりてこれ位の男何程の事かあらんといきなりに取
てかゝれば無難作にぞ投げられける。次なる若者敵討たんと組みつ
けば之も物の見事にぞ投げられける。其外幾人となき取てかゝる者
此有様なれば終には大閨某自ら大勢の耻辱を雪がんととのさりくと
思み出づ。皆々此勝負こそはと片唾を呑んで詠め居れば、二人は立
ち上りエイと組みお、と引き左をさし右をはつし眸を凝らして睨み
合ひたる其途端に、如何したりけん彼男のつと寄るよと見えしまゝ

にさすがの大関も難なく土俵の真中へ叩きつけられぬ。見物はあつけに取られたり。やがてさまぐの評判こそ口へさゝやかれけれ。去るにても彼の飛入の男は誰ならん此村には見馴れぬ顔の男なり、北村の人に聞けども北村の人も知らず南村の人に聞けども南村の人も知らず、さりとて本場を踏める闘角力といふ風采にもあらねば通り掛りの武者修行といふ打扮にもあらざりけり。疑惑は疑惑に重りぬ。私語はいよ／＼かしましくなりぬ。中に一人の年よりたる行司のしわぶきして、小声にていふやう、皆の衆静かにせよ、彼れこそはかしの山の頂に住めるといふ天狗様にこそはあるらめ。今宵の振舞を見るにたゞ人とは覺えず。思ふに我等の力わざに耽りていと誇りがはなるを片腹痛しとて斯くは懲らしめ給ひたるものにぞあるらめといへば、皆々顔見合して懲元寒しと身振ひなどすめり。蕪村は奥に此一場の事奥を取り来りて十七字の中には包含せしめたり。而して其骨子は怪の一字に外ならず」（『俳諧大要』一五六）と説くように解する時には、『あや・しき』の一句には、2・2の音群の両端に於ける音調から非常に複雑なる節奏を聞くことができる。この例は、この複雑さを見るのに便利であるから抄録を試みたのであるが、句法の変化を精密に研究するならば、こうした事実の数々を視ることができようであろう。」（有朋堂版「国語の力」、二二一—二二三）

この蕪村の一句についての正岡子規の解釈は、「俳諧大要」の中の、第六 修学第二期 に収められている。「国語の力」に引用されている本文の首尾に、なお、つぎのような部分があり、それが引用者垣内松三先生によって、省略されている。

引用文の前に——「俳句に入る事深く自ら俳句を作りて幾多の秀句を為す人猶且つ此句を捨て、平凡取るに足らずと為し毫も顧ず而して其解釈を問へば則ち浅薄にして殆んど月並者流の句を解するが如く然り蕪村をして之れを聞かしめば果して如何とか言はん」〔「俳諧大要」、九五—〕

引用文の後に——「角力は難題なり人事なり此錯雑せる俗人事を表面より直言せば固より俗に墮ちん裏面より如何なる文学的人事を探り得たりとも千両職は終に俳句の材料とは為らざるなり然れども蕪村が此俗境の中より多少の趣味を具する此詩境を探り出だししかもそれを怪の一字に籠めたる彼の筆力に至りては俳句三百年間誰一人其望を辱する者があるべき世人亦た此解釈を不当として種々に解釈を試むる者あるべし然れども恐らくは其解釈は怪の一字を解し得ざるべく然らざれば一字一句金鉄の如く緻密に泰山の如く動かざる蕪村の筆力を知らざる者の囁語のみ」（『俳諧大要』、九七—九八）

これを見れば、蕪村の「飛び入りの」の句についての、子規の解釈を中心として引用し、句解釈の前おきや他の解釈者への所見などは、省かれていることがわかる。

この部分の引用は、垣内先生によれば、蕪村の句の「あや・しき」に見られる、2・2の音群における音調から非常に複雑なる節奏を聞き、見るためになされている。正岡子規の「あやしき」を中心とする蕪村の句の解釈をふまえて、「節奏」の問題を論じていくのに役立つようとしているのである。ここには、正岡子規の解釈を認めて、それをとりあげていく、垣内先生の解釈力、解釈観を見るこ

とができる。同時に、子規の精神鋭利な解釈に依存するだけでなく、そこから、「節奏」の問題を引き出してくるところに、垣内先生の創見を見いだすことができる。

蕪村に関する、「俳人蕪村」・「俳諧大要」からの三つの引例については、垣内先生みずから、「国語の力」に、

「¹叙説の変化を求むるために俳句の上から二三の例を求めて、この問題を考へて見たいと思う。」(有朋堂版「国語の力」、二〇八頁)

「俳句を見たのは唯叙説の変化を求めたためであったが、その類型に拘泥することなく、狂句狂歌等の方面を見ても、パロデーの利くところは、概ね複雑なる考えから産み出した音調であつて、これを散文的文法的又は一般に解釈するような仕方ではそれを捉えることはできないと思う。」(有朋堂版「国語の力」、二一四頁)(傍線、引用者。)

と、記していられるように、「文の律動」のうち、「一四 強音の發達」を論述していくのに、変化を求めていくのに、用いられたのであつた。

ここでいう、「叙説の変化」とは、なんであるか。「国語の力」の「四 文の律動」のうち、

一一 音群とアクセント には、「東の野に陽交の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ」の歌が考察の対象にされ、

一二 歌の形 には、

(一) ひんがしの――

野に・かぎろひの・たつ見えて――

かえり見すれば・月傾きぬ――

(2) 袖ひちて・結びし水の・氷れるを――

春立つ今日の――

風や・解くらむ――

(3) 春日野の・若菜摘みにや――

白妙の――

袖ふりはへて・人のゆくらむ――

(4) 花をのみ・めづらん人に――

山里の――

雪間の草の春を見せばや――

などが引用され、それらは、一三 ストレッソの影響 にも、引かれてはいる。

このようにして、一一・一二・一三と、万葉集(一)・古今集(二)

(3)・新古今集(4)の和歌を引用して叙説を進めてきているので、一四 強音の發達 においては、変化を求めて、俳句について考察を加えようとしたものと推察される。

垣内先生は、「国語の力」の「四 文の律動」のうち、一四 強音の發達 を説くにあたって、まず、つぎのように述べられた。

「韻律の分化展開をある主観的個人的趣味で解釈しないのでありのまゝに見る説方をする時に、その韻律を支配するものは音数・歌格等の外面的約束でなくして、常に文化と人格との内面より流れる律動であることが分る。個人的主観的の趣味を標準として批判を加えないでその事実を諦視して心の律動を諦観することが韻文を解釈するには最も自然な態度であるのに、特に韻文に於ては常に趣味に囚

わかれて批判的批評に陥り易い傾きがあることを見ても、韻律の力がいかに根強いものであるかということが分るのである。特に強音の如きは韻文の全体に影響を与えるのであるから、その句法の好悪は個人的主観的に批判され易いのである。併しながらその発達は文化の流動を示現するものといつてよいのであるから如実にその展開の跡を見るならば、独り韻文を読むというに止まるものでなく文化の自叙伝を読むこともできるのである。」(有朋堂版「国語の力」、二〇七—二〇八)

垣内先生は、韻文における強音の發達・展開に着目し、それを時代文化とも関連づけて、考察されようとした。韻文におけるストレッツスの歴史を、俳句の展開、とりわけ、蕪村に拠つて、見ようとしたのである。

したがつて、蕪村の句十一を挙げて、それに圈点が付してあるのは、子規のそれによりつ、さらに、垣内先生の「強音」(ストレッツス)の視点から付されているようである。そう見るとき、初めて、

時鳥平安城をすぢかひに(「国語の力」、二〇九)

の圈点をとらえることができよう。

垣内先生の句法研究・節奏理解が、子規の解釈にのみ依存していたのではないことは、たとえば、蕪村関係の引用の後に、「をちこちをちこちと打つ砦かな」(蕪村)の句に関して、「『をちこちをちこち』の句にしても、その節奏は深く作者の心の中に、よくつり合いがとれて居るのであり、前には鬼貫の『油さし〜つ〜ねぬ夜かな』、惟然の『水鳥やむかう岸へつうい〜』あり、後には一茶の句の『けろりくわんとして鳥と柳かな』の如きあり、内心の律動と

よく調和した節奏が現われて来るのは、句法の変化というような外面的なことではなく、更にその内面を透見せねばならぬではあるまいか。芭蕉、蕪村の句の明治より現代に至る文学反響又は新傾向句に就いても同じように考えることができる。」(有朋堂版「国語の力」、二一三—二一四)と、述べられているのを見てもわかる。俳句の展開・節奏の理解について、大局的に確かに見通されていたことがうかがえるのである。

こうして見れば、芭蕉・酒堂・凡兆・蕪村から現代に至る俳句の展開の中に、とくに、強音の發達・発現について、蕪村を対象にとりあげられ、それをとりあげるにあたっては、正岡子規の蕪村評釈が大いに活用されたのであった。子規の卓抜精確な解釈が、垣内先生によって、巧みに生かされ、それに節奏理解・強音研究が新しく生かされたと見られるのである。(昭和40年8月19日稿)

(本学助教)